

二〇二一年度 国語

(六十分)

答えはすべて 解答用紙 に書き入れること。

中一會

一 次の文章は、芥川龍之介の「鼻」の全文です。読んであとの問いに答えなさい。

禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が碗の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられている内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も

妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実^{じじつ}に左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損^{きそん}を恢復^{かいふく}しようと試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を実際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝^aらして見た。どうかすると、顔の位置を換^かえるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖^{ほつづえ}をついたり頤^{あご}の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗^{のぞ}いて見る事もあつた。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえつて長く見えるような気さへした。内供は、こつこつ時には、鏡を箱へしまひながら、今更のようにため息をついて、不承不承^{ふしょうぶしょう}にまた元の経机^{きょうぐゐ}へ、観音経^{かんのんきやう}をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説^{そうぐこうせつ}などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊^{そうぼう}が隙^{すき}なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗の類^{たぐひ}も甚^{はなは}だ多い。内供はこつこつ云う人々の顔を根気よく物色^{ぶつしき}した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺^{こん}の水干^{すいかん}も白^{しろ}の帷子^{かたびら}もはいらぬ。まして柑子色^{かんじいろ}の帽子や、椎鈍^{しいにび}の法衣^{ころも}なぞは、見慣れているだけに、有れども無きが如^{ごと}くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻^{かぎばな}はあつても、内供のよつた鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従つて、内供の心は次第にまた不快になつた。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下つている鼻の先をつまんで見て、年甲斐^{ねがひ}もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所^{ところ}為^{ため}である。

最後に、内供は、内典外典^{ないてんげてん}の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分^{いくぶん}の心やりにしよつとさえ

思った事がある。けれども、目連(注10)や、舍利弗(注11)の鼻が長かったとは、どの経文にも書いてない。勿論(注12)、竜樹(注13)や馬鳴(注14)も、人並の鼻を備えた菩薩(注15)である。内供は、震旦(注16)の話の序(注17)に、蜀漢(注18)の劉玄德(注19)の耳が長かったと云う事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜(注20)を煎(注21)じて飲んで見た事もある。鼠(注22)の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然(注23)として、五六寸の長さをぶらりと唇(注24)の上(注25)にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己(注26)の医者から長い鼻を短くする法を教わつて来た。その医者(注27)と云うのは、もと震旦(注28)から渡つて来た男で、当時は長樂寺(注29)の供僧(注30)になつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事(注31)の度毎(注32)に、弟子の人数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏(注33)せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈(注34)はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従(注35)する事になつた。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹(注36)でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提(注37)に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷(注38)する惧(注39)がある。そこで折敷(注40)へ穴をあけて、それを提(注41)の蓋(注42)にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少し

も熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹^ゆった時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思ったからである。鼻は熱湯に蒸^むされて、蚤^{のみ}の食ったようにむず痒^{がゆ}い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿^はげ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛うはござらぬかな。医師は責^せめて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼^{うわめ}を使って、弟子の僧の足に輝^{あかり}のきれているのを眺^{なが}めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。実際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえって気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒^{あわぶつぶ}のようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしった小鳥をそっくり丸炙^{まるやき}にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

——これを鑷^{けぬき}子でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬^{ほお}をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分っても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷^{けぬき}子で脂^{あぶら}をとるのを眺^{なが}めていた。脂は、鳥の羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにもぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、ハの字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの頤の下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。こうなれば、^①もう誰も晒うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはいしなやかと云う不安があった。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前より一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そののみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかった下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二

度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が晒う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにとことなく容子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのようにつけつくと晒わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こう呟く事があつた。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」^②ふさぎこんでしまうのである。——内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからにはほかならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまいには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠える声があるので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまわして、毛の長い、痩せた彪犬を逐いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻

を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と嘸しながら、透いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひたたくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさいほど枕に通って来た。その上、寒さもめっきり加わったので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこのだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晚の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光っている。禅智内供は、(注) 節を上げた縁に立って、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から頤の下まで、五六寸あまりもぶら下がっている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同じに、鼻が短くなった時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、(注) もう誰も晒うものはないにちがいない。

(注) 内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

- (注1) 沙弥しゃみ
- (注2) 鏡かなまり
- (注3) 中童子ちゆうどうじ
- (注4) 嚏くそみ
- (注5) 喧伝けんでん
- (注6) 水干すいかん
- (注7) 帷子かたびら
- (注8) 所為しよゐ
- (注9) 内典外典ないでんげでん
- (注10) 目連・舍利弗もくれんしゃりほつ
- (注11) 竜樹・馬鳴りゆうじゆめみょう
- (注12) 震旦しんたん
- (注13) 蜀漢の劉玄德しよくかんりゅうげんとく
- (注14) 折敷おしき
- (注15) 残喘ざんぜん
- (注16) 法慳貪ほうけんどん
- (注17) 九輪くりん
- (注18) 部しよ

修行未熟な僧

金属製の椀(わん)

寺で、給仕や高僧の外出時の供などの雑用に使った十二、三歳の少年くしゃみ

盛んに言いはやして世間に広く知らせること

絹織物・公家(くげ)や上級武家の私服

生絹や麻布で仕立てた、夏に着る一重(ひとえ)の着物
しわざ・振る舞い

仏教の書物(内典)とそれ以外の書物(外典)

それぞれ釈迦(しゃか)十大弟子の一人

人名

古代中国の異称

中国三国時代の武将である劉備(りゅうび)のこと

檜(ひのき)のへぎで作った縁つきの盆

残り少ない命

けち・欲張り

寺の塔の頂上部、露盤上の柱にある九つの輪裝飾

平安時代から住宅や社寺建築において使われた、格子を取り付けた板戸

問一 傍線部②「ふさぎこんでしまう」とありますが、内供はまだはっきりと気づいていないその原因を文章中から十字以内で抜き出しなさい。

問二 傍線部①と傍線部③「もう誰も晒うものはないにちがいない」という内供のセリフは全く同じですが、その時の心情には大きな違いがあります。その違いをあなたはどうか考えますか。200字以内で述べなさい。

問三 傍線部④「内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら」の表現技法を答えなさい。

問四 問題文以外の芥川龍之介の作品を、一つ答えなさい。

問五 二重傍線部 a ~ e をひらがなに直しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「国語は、ほかのどの教科と似ていると思うか」、高校に入学したばかりの一年生を前に、まずそう問いかける。これに対する反応で、その生徒が中学校まで国語をどのような教科と違って学んできたかが知れる。「社会」と答える者がいる。国語・社会は同じ「文系の科目」という先入観がそういわせることが多い。漢字や語句の意味などをたくさん覚えたという印象がそういわせることもある。「英語」と答える者もいる。日本語の学習も、英語の学習も、ともに語学の学習ではないかというわけである。むしろ、すべてが間違っているということはない。「数学」、「理科」と答える者には、ほとんど出会わない。まれに「音楽」などという者もいる。理由を聞くと、「感じることを大切にすると」と、表現するおもしろさがある点で似ている」という。「文学」を中心に国語を考えてきたのかもしれない。

教師と生徒との関係をいえば、国語は実技教科に「ヒカク」的に近い。①、「体育」。とび箱をとび授業で、教師は

とび方を説明するかもしれない。どうやったらより高い箱をより美しくとぶことができるかと。あるいは、教師自らがつんでみせることもある。ハイレベルのとび方が生徒のため息を誘うこともある。②、その教師の説明や「モハ

ン演技と、生徒がとべるかどうかということとは、直接的に結びついていない。どんなにたくみな説明がなされても、それに対する生徒の理解がいかに正確であっても、あるいは、先生がこれ以上ないというとび方を「ヒロウしようとも、生徒本人がトライしてとぶということ以上の意味はない。やってみなければ上達は望めない。」A

なかから、自らつかむものの価値を知らないで、上達していくということはないと思う。国語も同じである。教師の説明、教師のすぐれた読みなどは、ちょっととしたヒントといった程度のものである。それを記憶することよりは、それを生かして自ら読むということを大切にされた方がよい。A

する者だけが手助けの意味を知っていくという構造がある。表現の場合も、事情は変わらない。③、この知的実技教科の場合も、体育と同じくいろいろな種目があるが、どの種目においても、この基本は同じである。

④、思春期にある高校生が、この知的実技教科を学び、さまざまな試行を繰り返すことにどんな意味があるのか。それを考える前に、しばらく「思春期」という時期について考えたい。高校三年間という学校制度の一区分で考えるより、人生の一区分をイメージした方が、この問題を考える場合に有効だと思われるからである。「思春期には思春期特有の悩みがある」などと表現されるとき「思春期」は、「青年期」とまったく同一の意味内容をもっているわけではない。この場合の「思春期」とは、つまり、次のような意味で使われている。「肉体的には成熟し、じゅうぶん一人前（成体）でありながら、社会的には自分一人で生きていくことができない（許されない）ために、社会的には未成熟で一人前ではないとされる時期」。思春期とは、一人前でありながら一人前ではないという矛盾を含んだ時期ということなのである。当然、悩ましい。この時期にあるひとがめざすものの第一は、「大人」として一人で生きていくということにな

る。国語という知的実技教科は、そのために寄与できるのではないかというのが、わたしの意見である。

「大人」とは何かについては、いろいろな定義の仕方が可能であろう。仮に、その定義を「何に対しても自分で決断し実行することができ、人生の方向を自分で決定づけることができ、自らの人生に自ら責任の負えるひと」ということにする。思春期にある高校生は、そう簡単に「大人」になることができない。人生における決断をしようにもその機会は少なく、もしそのような機会が訪れたとしても、決断の材料に「トボしい場合が多いからである。実行したことの責任をとるうにもほとんどその機会がなく、責任の取り方も何もわからないからである。思春期にある者が時間を経れば自然に「大人」になっていく、ということはない。② 肉体の成熟を支えるのは、口から入る食べ物であり、ときが経てば肉体は自然に大人になる。しかし、本当の「大人」になるには **C** の成熟を待たねばならない。 **C** の成熟にとつての食べ物とは、いったい何か。頭や心に入り、そこにどまるとまる言葉なのではないか。積極的に栄養になるものを（ひよっとすると、あまり栄養にならない嗜好品も含めて）取り入れるのがよいと思う。国語はその手助けを一番直接的に、直接的なだけに、コウカ的にできる教科だと思っている。いろいろな言葉を取り込んでこそ、やがて直面する人生の決断も、自己に責任をとることも可能になろうというものである。

国語教師としての **B** をもうすこし続けさせてもらおう。ここまでいささか安易に「人生」という言葉を使ってきたのだが、「人生」の正体は何なのだろう。わたしは「人生」が言葉と深く関わっている、言葉の運用こそ人生だという思いから離れられないでいる。言葉で自分のまわりに広がる世界を理解し、言葉で世界を語る。信念とか思いとかいう名のついた言葉を胸に、言葉で自分をかきたて、励まし、いろいろな行動を起こす。加えて、言葉で自分の思いを吐露し、ひとと語り合い、交流し、人間関係を結ぶ……。そういうことの総和を人生とよぶのではないか。だとすれば、言葉をみがき、言葉の精密な運用をめざす「国語」という教科は、「人生」のすぐ近くにある。「なぜ国語を学ぶのか」という問いへの答えは、シンプルである。③ よりよい人生、より豊かな生のために学ぶのである。とくに、おのれの人生

を本気で考えはじめる、思春期にあるひとたちが、この教科を学ぶ意義は大きい。

〔なぜ国語を学ぶのか〕村上 慎一の記事から

問一 あなたは、なぜ国語を勉強すると考えますか。150字以内で自由に述べなさい。

問二

A

B

に入る適切な四字熟語を後の語群から選び、漢字に直して答えなさい。

きしかいせい
しこうさくご

ちようれいぼかい
がでんいんすい

ぜんだいみもん
かんぜんちようあく

しんらばんしょう
りんきおうへん

問三 筆者は「国語を学ぶ意味」を傍線部③「よりよい人生、より豊かな生のため」と言っていますが、そのために具体的に、何をすれば良いのですか。それを述べているひと続きの三文を文章中から探し、その最初の五字を答えなさい。

問四

①

く

④

に適する接続語を、次の中から記号で答えなさい。

ア また イ たとえば ウ または エ しかし オ さて

問五

C

には、傍線部②「肉体」の対義語が入ります。漢字二字で答えなさい。

問六

二重傍線部 a く e を漢字に直しなさい。